

いし、理解も薄れがちの時に、京都国体の行進曲に「岸壁の母」が、そして舞鶴に「引揚記念館」ができたことは、非常に感銘した次第である。舞鶴市はもちろんのこと、全国からの協力によって建設されたとのこと。関係者の努力に対し、今更ながら謝意を表したいと思う。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年一月七日

入営前の職業 小山産業組合 徴用で横須賀海軍工廠

復員 昭和二十三年八月

復員後の職業 昭和二十三年十二月 小山農業協同組

合

昭和二十六年 岩手県経済連

昭和六十年 胆沢町農協理事

(岩手県 田辺 壮久)

戦闘・シベリア抑留

岩手県 安倍 庄吉

入隊、新兵時代

昭和十九年徴兵、現役証書は大阪集合命令書であった。岩手県南、奥羽山系、熊の出没する山近くの片田舎より現役の兵隊として出立したのは昭和十九年一月十三日、零下十度以上もある雪の降る寒い夜、歓呼の声に送られ水沢駅を大阪まで直行の臨時列車で出発した。若柳村から歩兵一八一部隊へは内田敏男、那須隆、安倍吉郎、土井今朝治、砲兵二三六部隊へは私人だったので寂しく感じた。同年兵は全部岩手出身者で、歩兵と砲兵合わせて千五百人くらいと思われた。十六日、集合場所は兵舎ではなく大阪の本願寺別院で、初年兵受領に来たのは一大隊の長野亘中尉を長として、萩原准尉と神崎軍曹が私の中隊受領員であった。ここで歩兵一八一部隊と野砲二三六部隊に分けら

れて同一行動をした。その日のうちに、病院で身体検査があり予防注射をして、新しい被服装備等の支給を受け、二等兵の襟章を付け、初めて軍人として国防の第一線に立つのかと思うと身の引き締まる思いがしたが、「お前等は一期検閲前は一人前の兵隊ではない、〔二等兵だ〕と気合いをかけられてがっかりした。その日は旅館で夕食。食後、非常呼集がかかり船に乗った。船で出発かと思っていたら、今度は汽車に乗り換え、出発したのは次の日の早朝であった。瀬戸内海を通るときは軍事の秘密とのことで窓を閉め、外部は一切見ることはできなかった。

九州博多港は十八日夜明け前であったと思う。夜、満期除隊の人達とすれ違いになり「頑張ってこいよ」と励まされ船に乗ったが、海が荒れ、半数以上の人たちが船酔いに悩まされつつも、無事釜山港に上陸。今度は日本の客車より一回り大きい、ムツとするようなニンニクくさい客車に乗り、京城の奇麗な町並みを車窓にながめながら一路北への長旅であった。途中、家では食べたことのない肉汁とか甘味品等の支給を受

け、給与は大変よく、演芸会なども開かれ、和やかな旅であったと記憶している。

何より不安であったのは、田舎育ちで伐木と稲作よりはか仕事のできない世間知らずが、皆と同じに進んでいけるのかということであった。この思いは私だけでなく、幹候要員以外は皆同じ考えだったと思う。

朝鮮を過ぎ、満州新京を経て、家を出発してから十日目の一月二十三日の午後、三十分くらいは要する長い長い興安トンネルを過ぎアルシャンへ到着。野砲二三四部隊は下車。一八一部隊は一駅先のイルセに。古年次兵に迎えられ午後三時過ぎ、一尺五寸も積もった雪を踏み分け野砲隊の第二三四部隊田中隊第四班へ配属された。

印象に残っているのは、兵舎は威風堂々たる鉄筋コンクリートの三、四階建て、蒸気で炊いた御飯を食べることができると想像していたのが、実は木造平屋半地下式兵舎、炊事は俗に雑水釜（ヤマガマ）で炊いたメッコ飯で、土方飯場に等しいのには驚いた。私たち新兵に与えられた私物棚にはビール一本ずつ全員に行き渡っていた

ので、夜は歓迎会を盛大に開くのかと内心喜んでいたところ、嗽水うがいみずであったのにはガツカリした。

次の日は、軍服から軍靴まで全部戦用品とのことで引き揚げられ、代わりに継ぎはぎだらけの軍服と変形もはなはだしい軍靴が与えられた。不動の姿勢もとれない始末。営内作業ならともかく、外出等できる姿ではなかった。

昭和十九年一月の編成は満州第二三六部隊栗田隊。

中隊長栗田清一中尉、隊付将校は越智少尉、仲田少尉。四班班長工藤勇吉伍長、初年兵係は座金の付いた木村広治幹部候補生、通信の成田勝江上等兵の二人で、軍隊用語、日常生活上の規律等嚴格に基本的な知識を教わった。

アルシャン地区はノモンハンの手前にあり、興安嶺の頂上付近と思われ、白樺林や高山植物、夏は宵待草が満開となり、野も山も一面黄色となった。八月になるとナデシコ等実を結び、九月中旬となると雪が降り始め寒さは厳しく感じられ、十二月は零下三〇〜四〇度が普通で、雪も五十センチくらいの積雪となった。

ある日零下三〇度のとき、営庭で耐寒試験が行われた。初年兵八十人が片腕を高く上げさせられたが、指が凍る直前まで一分以上上げていた人は一人もなかった。寒いというより痛く感ずる。零下四〇度以下ともなると朝、既掃除のときなど、馬糞や吐く息から湯気が立ち、見ているうちに結氷に変わりキラキラと舞い落ちる。まして鼻から呼吸すると鼻が凍傷になるので、呼吸困難な金魚がアップアップしているように苦しくもあり、滑稽でもあった。

また話によると、軍隊の私的制裁が厳しいのに耐えかねて逃亡した兵隊が途中で助けられたが、手、足、顔が凍傷となり手足切断、だるまさんのようになったとか。もつとも逃亡罪は、軍事裁判ものであった。

古年次兵の紹介があり、二年兵は全員青森県出身者、三年兵は青森県、岩手県に本籍のある人達であった。

記憶をたどりつつ、四班の戦友を列記すると、大久保新一郎（青森）、中隊事務山崎古兵（岩手）、大田昌二（青森）、衛生兵石倉三郎（青森）、鞍工兵品川上等

兵（青森）、酒保勤務松橋重幸（青森）、当番要員鈴木義栄（青森）、現地自活三浦一（青森）、斉藤曹長の当番田村銀次郎（青森）、工務兵類家喜義（青森）、蹄鉄工岡山定吉（青森）であった。

入隊三日目、掃除のため湯沸かし場へ湯を貰いに行くと「黙って湯を持っていくのは誰だ、ここへ来い」と声高に気合いをかけられた。もうもうと立ち上る湯煙（寒いため特に日立つ）の脇より出て来たのは五尺五寸以上もある大男で、目鼻等大きく、顔は煙で煤け、服はどす黒く、見るからに恐ろしい古兵殿がいた。「どうもすみません。今後気をつけます」と謝ってきたが、後で加賀谷古兵殿だとわかった。星二つの古兵殿よりは身近に世話にもなるが、特におっかないと感じた。坂本古兵殿（三年兵）は新兵時代、ビンタを取られ前歯八本折られたとか、恐ろしいことだ。一週間も過ぎると、内務のことから野砲兵としての訓練が激しく、ビンタ、ビンタで顔は変形し、親や知人に見せる顔でなかった。

豪商の坊ちゃんも、貧乏人の仲間、親のない不幸な

青年も、大学上がりの若旦那も、異端者も、百姓も、奉公人も、勤め人も、生意気な気分が残る若者も、皆強大な権力の大ミキサにかけられ、大日本帝国軍人に仕立て上げ、中支、南支、フィリピン、沖縄等へ派遣するところだから、軍隊というところは大したところだ。

いよいよ砲手としての教育が始まった。砲手班の訓練は激しく、助手、助教は工藤豊四郎、免内潤、上山忠、柏山上等兵、野宮伍長が担当、新兵で砲手教育を受けた者は、十文字秀雄、新毛助蔵、長谷長雄、千葉俊二、小野寺博、松館正三、高橋政治、高橋秀水、熊谷憲三、それに私の十人であった。火砲は四門で、一、二分隊は大変張り切っていたが、私たち三、四分隊は間違いやミスが多く、いつも叱られてばかりいた。

その後、第一期の検閲。六月は師団を初め連隊の編成替え、連隊の射撃演習、補充兵、新兵の入隊、各中队より火砲一門ずつ返納、転属等々次々と変転。二十年四月頃、中隊に残った同年兵はわずか十二、三人は

どであった。転出した中に小山村出身の高橋（渡辺）留治君もおり、私と同じ中隊で甲種幹部候補生として訓練中、憲兵志願したことにより内地で教育を受け、仙台憲兵分所で勤務中終戦となり、同年兵中ただ一人、少尉に任官して帰郷している。

開戦

昭和十九年六月、アルシャン駐屯砲兵隊を基幹として野砲兵第一〇七連隊を編成、第一〇七師団隷下に編入。野砲兵第一〇七連隊、連隊本部第一大隊、第二大隊、連隊段列は興安南省徳伯斯トボスの新兵舎に移駐。アルシャンには今までどおり、私たち第三大隊山砲三個中隊が残留警備した。

昭和十九年六月から二十年七月まで新作戦方針の下に陣地構築が始まり、第一〇七師団司令部はアルシャンから五叉溝に移駐。また野砲連隊の各中隊主力は五叉溝で陣地構築に従事し、自余の隊員及び火砲、馬匹等アルシャン（駐屯地）に残留、私も残留組であった。

昭和二十年八月九日、私は深山彈薬庫衛兵を下番。

今度は衛戍衛兵。歩哨掛をしていたとき、今まで飛んだこともない飛行機が兵舎の上の停車場方面に飛んで行った。国籍不明だが珍しいことだと思っていると、また飛んで来たが、今度は水道高地へ爆弾を投下。間もなく、命令受領者集合のラッパが鳴り渡り、「ソ連軍が侵入中である。大隊は速やかに五叉溝にある本隊主力と合流して戦闘編成を整えろ」との命令が伝達された。

大砲、弾薬は関見習士官の指揮により本隊まで鉄道輸送され、糧秣、被服、陣営具等は梱包され、混乱の中、撤退準備が着々と進められた。夜九時頃、一人二、三頭併馬、できるだけ多く馬に積み、兵舎はそのままにして出発。

深山彈薬庫前を通り、興安トンネルに着かないうちに夜が明け、またソ連機の空襲を受けつつ前進。振り返って見ると、アルシャンの糧秣集積所に火が付き、黒煙を上げての大火災が確認された。一大隊、二大隊の火砲は徳伯斯の兵営に残置してあり、当師団の主力は山砲三大隊の九門に頼るよりほかなかった。

十二日から十三日朝にかけての西口の戦闘では、我が山砲中隊三門で歩兵二〇一部隊への援護射撃は夜襲でなく払暁戦であった。我が三小隊は四〇〇五〇発ほど発射したと思われ、砲身に熱を帯びてきたので休んだ。朝方となり朝もやで視界がきかなくなっていたが、山砲の弾着も良かったと思われ、歩兵の鬨の音が二、三度聞こえ、敵陣を占領したとのことであった。

私たちは疲れに加えて火砲の首で耳が聞こえなくなり、火砲の下で眠った。九時頃目を覚ましたときは、友軍の歩兵二〇一部隊の突撃は近代装備の大部隊に齒が立たず惜しくも敗退、山砲陣地を目標に退却した。その中には、戦友の形見と称して両腕に時計五ないし八個を持って来た人もあった。火砲の眼鏡で眺めると、遠くで敵の兵隊が物珍しげに友軍の遺体から追いはぎを始めた。フンドシまではぎ取る様子が手に取るように見えた。

夕刻、陣地を撤退。一大隊、二大隊の火砲を持たない大隊が先陣。それに七中隊が続ぎ、徳伯斯の留守部隊のいる連隊本部兵舎へ合流するため丘陵地帯を行

軍。夜は尖鋭弾、照明弾の交差する中を、運悪く玉山君の引く砲架馬が沢に転落するという一幕もあり、岡山上等兵他数人の人達の苦勞の結果、無事に引き揚げ作業も終わり、また行軍に移った。

途中、前方索倫ソコに敵軍が進出しているので進むことができないとの通報があり、本部の兵舎を目前に反転、また来た道に戻る羽目となった。

武装解除

十四日、敵軍の動きも活発となり、活路を得べく切り込み隊が編成された。主に五叉溝で陣地構築参加中の火砲を持たない一、二大隊の人達であったが、我が中隊にも下命があり、萩原少尉以下数人の人達で水盃を酌み交わしていた。師団主力の山砲の人員を減らすことは好ましくないとのことで、我が中隊は解除になって次の戦闘に備えた。

翌十五日、敵歩兵の出没する中、火砲を六頭の馬に駄載して丘を越え、次の陣地に移動することになった。そのとき、松館上等兵より三番砲手を替わってくれないかとの話があり、軍律厳しい中を戦友の誼で快

く位置を替わった。中隊長の命令一下、次の陣地へ馬を鞭打ちながら一挙に駆け出す。敵もさるもの、このときとばかりに自動小銃他の火器の一斉射撃に遭う。

弾がビュンビュン飛び交う中を走る。運動会の選手のように全力疾走して危機を脱出したが、突然、砲身馬と共に走ってきた松館君がバツタリ倒れた。「あつ、やられたな」と思っていたら、むっくり起き上がって走ってくるではないか、軍衣の胸を真っ赤に染めて。

傷は頭部貫通銃創で、奇跡的にも頭部動脈、気管、食道等の急所を避けて、弾丸が首の真ん中を通過したのだが、その後無事に復員でき元気で働いている。魔術師でも真似のできないことである。

午後、南側の平坦地に出て師団司令部の守りについてたときは、東側と西側、腹背に敵を受けた形となる。特に西側からの攻撃は凄まじく、重戦車、自走砲、カチューシャ砲（東部戦線でソ連軍がドイツ軍より捕獲した新鋭砲で、砲身が十本あるロケット砲で連続弾を発射する砲）等の近代兵器から撃ち出す音は雷のごとく、ピカッと光ったと思ったときはすぐ前に大きな砲

弾が落弾炸裂し、破片は鍋釜をたたき壊し、それを力いっぱい投げたより強く、大きい破片が当たると足一本腕一本、即時飛んでしまう。隣村（前沢町）の長谷川上等兵の壮烈な戦死は、形見としての穴のあいた鉄兜を持ってきたものの、残念ながら遺体を収容することとはできなかった。

敵軍は高地からの射撃が終わるやいなや、今度は高地の陰から軍用道路を戦車で一両、二両と一列縦隊となつて現れた。肉眼では二十台を超える戦車群となつて我が陣地に向かって進んで来たのであったが、七中隊の砲撃によって撃破退散させた。一〇七師団の連命が我が中隊長の双肩にかかっており、すぐ後方の師団司令部の将校がガタガタして「早く撃て、何をもちもたしているのか」と勝手に指令を出すなどの乱れもあったが、我が越智中隊長の引き寄せ作戦が功を奏し、敵の心胆を寒からしめ、我が師団は玉砕することなく立派に血路を開いたことは、戦後のこととはいえ高く評価されるべきと考える。

敵ソ連軍は、高地より師団司令部の位置をいち早く

確認し、高地からつるべ撃ちにして叩き、その後戦車で蹂躪、全滅させる考えであったろうが、我が隊が敵戦車の進行に合わせて、二番砲手の照準器は直接照準で先頭戦車を追い続けていたとは気がつかなかったらしく、中隊長の「砲撃開始」、分隊長の「撃て」の号令も待ち遠しく、一番砲手が力強く拉縄を引くと轟然と発射音を上げて砲撃を開始。初弾は先頭戦車に命中した。

戦車は黒煙を上げて停止した。戦車の側面を走っていたソ連兵の集団が一瞬のうちにバタバタ倒れた。敵戦車群が反撃に出る前に制圧しなければと、連続射撃で戦車と歩兵群に必殺の命中弾を浴びせかけた。敵戦車が態勢を立て直す間もなく砲弾を打ち込んだためか、後尾にいた戦車がズルズルと後退を始めた。道路をそれて後退するものもあり、今まで一列縦隊だった戦車群に混乱が巻き起こった。砲撃をやめた戦車群が狭い道路上で一斉に反転し、退却を始めた……。

たった三門の山砲がソ連戦車群の攻撃を阻止したのだ。午後五時頃、攻撃が一時途絶えたとき、陣地の撤

退命令が出た。一番御者の佐藤上等兵が元気良く馬と共に御者陣地より駆けつけ、火砲を牽引して運んだ。折しもどしゃ降りの雨の中、他の部隊が引き揚げた後から戦場を離脱した。

戦功を挙げたとのことで最後備で行軍とか。実は敵戦車群の進攻に備えての後備であった。十日後の号什台の戦闘のように勝ち戦であれば愉快だが、負け戦で戦場を離脱するということは筆舌に尽くしがたく、また悲惨なものである。軍規も軍律もなくなり、無統制状態となり、上官の命令など聞き入れず、戦歴のある古年次兵が先に立って「俺の思ったようにしなければ、後ろから弾を撃つぞ」などとハッパをかける。見習士官、将校はこの古年兵のなすにまかせて手も足も出ないありさまであった。気の利いた連中は輜重車を捨て、馬で私たちが着く一週間も前にイントールに着いていた。

道路脇の平地には友軍が捨てた荷車が荷物を積んだままひっくり返っていたり、そちこちに食料や被服のほか、色々と欲しい物がたくさん散乱していた。敵が

捨てた戦利品だと気持ちが良いが、友軍の物となると良い気がしない。だんだん暗くなって、米国からの援助を受けたタイヤ十本もあるトラックとジープ等で移動するソ連軍側と異なり機動力のない我が部隊は、延々と日数をかけて長蛇の行軍中、前方に火煙が上がつたので、また敵から攻撃を受けたのかと思つたが、話によると、湿地にはまった自動車を利用されるのが惜しいとのことで火を付けたため、ガソリンや火薬を積んだ自動車に引火、爆発炎上したものであつた。暗がりですべて「助けてくれ、助けてくれ」と叫ぶ者、泣く者、呻き声を上げる者など、湿地の中にはまり込み、泥や火傷で服はちぎれ、目もあてられない悲惨なありさまを横目に見ながら通過したが、その中に初年兵時代、大阪まで迎えに来た長野恒ほか佐久間准尉殿もおられたとかで、ご冥福を祈らずにはおられない。合掌。

小雨の中、崖を登り興安嶺の山中に入ったが、翌十六日午前、敵の部隊が進撃、山陰より迫撃砲を撃ってきた。七中隊の陣地に唸りを立てて落ちてくる。どこ

から撃ってくるのか不明だが、二十数発飛んで来たと思われる。私の前に落ちたときは「やられた」と思つたが、運よく不発なので助かつた。午後になって敵は退却したのか、音がしなくなった。後になって聞いたことであるが、ソ連軍は北滿、東滿、西滿と三方から新京目指して一番乗りを競つたそうだが、途中でもたもたしていられないと諦めて新京目指して進撃したのかも知れない。

十七日以降のことは省略するが、その後八月二十五日、二十六日の勝ち戦である号什台の戦闘の後、二十八日にイントールに着き、静養する暇もなく、二十九日午前十時頃、上空に友軍機が一機飛来し、初めてみる友軍機、口の丸の標識がまぶしかった。

やがて超低空で頭上を旋回、少し離れた草原に強行着陸した。機上から降りてきたのは参謀肩章をつけた日本軍人二人、ソ連将校一人の軍使であつた。阿部師団長と会見。そして停戦。武装解除。私にとっては生涯忘れることのできない一日であつた。我が一〇七師団の戦闘は、全関東軍の中で最後まで組織的抵抗をし

た部隊であった。

「関東軍の將兵に告ぐ」

わが軍は天皇陛下の命により八月十五日、連合軍に対して無条件降伏をする事に決まった。

よって戦闘をしていた部隊は白旗を掲げて、最寄りのソ連軍に降伏し武器を引き渡すべし。

関東軍司令官 山田乙三

右のピラがキラキラと輝きながら屋根や道路上に舞いおりにきた。「こんな馬鹿なことがあるか。謀略だ」と吐き捨てるように叫んで、ピラを引き破り、長靴で踏みじめる将校もいた。私たちは割り当てられている宿舎に引き揚げて高粱飯で食事を始めたが、分隊の者の顔色が冴えない。皆それぞれ物思いに耽っている。「班長殿、本当に日本は敗けたのですか」と心細い声を上げる者もいた。「冗談じゃないよ、日本が敗けてたまるか、あれは敵の謀略だ」と頭から否定する古兵殿もいる。「二三六部隊全員集合」と呼集がかけられて、連隊の將兵が本部前の広場に集められた。部隊の將兵が整列すると一段高い場所に角田連隊長が上

り、日本の敗戦が現実のものとして伝えられていく。無条件降伏、武装解除と耳を打つように響いてくると、整列した將兵の中から悲痛なつぶやき声はどこからか聞こえてくる。俄に激情が込み上げてきて、涙が溢れ出てきた。

重苦しい悲哀に包まれた広場の中で角田連隊長の聲が胸を打った。「武装解除の後は、陛下のお言葉にあった。堪え難きを堪え忍び難きを忍んで。今後の苦難を乗り切り、全員無事に祖国の土を踏んでもらいたい。」眼鏡の奥に光るものを湛えての訓示であった。

興安嶺の戦闘で死んでいった多くの戦友たちは、何の為に命を落としたのか。我々は何の為に苦勞して戦ってきたのか。考えると、胸の中を冷たい風が吹き抜けるような虚脱感に襲われ、全員茫然自失といった状態で話をする勢いもなかった。気分が落ちついてくると、アメリカ軍に占領された祖国のことや、屈辱に満ちた生活をしている家族たちのことに思いが走り、また暗い気持ちになる。だがこのとき、命だけは助かった、今からは敵弾の中をくぐることはない」という気

持ちがあったことは否定することはできない。

八月二十九日、祖国の敗戦の悲報に打ちのめされた二三六部隊の将兵にとって、嬉しい出来事があった。それは、索倫の戦場で全滅した第一大隊の生き残り将兵五十人が連隊に合流したことで、熊谷大隊長の日焼けた姿も見られた。

ソ連軍のイントール侵入は実に速かった。聞くところによると、敵の大部隊が戦闘隊形で迫っていたのだ。停戦命令が出てから一時間後には自動小銃を背にした騎馬隊一個小隊が到着した。武器弾薬の返納命令が出ると、部隊は急に慌ただしくなる。照準器を取り外した火砲は旗公署（県庁）前の広場まで搬送する。広場には、牽引車に引かれた九〇野砲が二門、九四式山砲は九門が整然と並べられた。自動小銃を小脇に構えたソ連兵が並ぶ前を、一列になった日本兵が銃を、帯剣を放り投げながら通り過ぎていく。広場には見るうちに小銃の山や帯剣の小山ができた。それにしても、山砲は最後まで一門も欠けることなく健闘したのは見事であった。先の騎馬隊と停戦の合意が成立。

その後、阿部師団長とソ連軍師団長クシナレンコ少将との会見が行われ、日露戦争の乃木大将とステッセル将軍の会見に似ており、ここに正式に停戦協定が成立し、捕獲した軍旗もここでソ連軍に返還した。

武装解除後、入ソまで

アルシャンを出るときは暑い夏の盛りであったが、八月末日ともなると秋風が吹いてきた。私にとっては、生涯忘れることのできない屈辱に満ち溢れた一日が終わった。明日から始められる捕虜という未知の生活に暗い不安を感じる。明日からまた野に伏せ、山に寝る生活が続くが、石にかじりついても無事に日本に帰ることが大事と、毛布を被って横になった。

翌三十日、起床とともに二時間後に出発と伝達され、慌てて大釜で高粱を煮込むと皆で分け、毛布や外被、天幕は細く巻いて束ね、肩にかけ宿舎を後にした。

日本軍の組織を破壊する目的か、師団の将兵は、将校、下士官、兵と三つの集団に分割集合した。阿部師団長はソ連軍にどこかへ連行され、姿が見えなかつ

た。將校は帯刀を許され出發。続いて我々兵隊も隊列を作り、負傷者も今日から歩かねばならない。包帯姿の松館上等兵も隊列に加わって出發した。馬繫場につながれた愛馬たちにも遠くから別れの声を掛けながらイントールを後にした。

武装を解除されたとはいえ、一万一千人の將兵を護送するソ連の監視兵は、僅か三十人ほどの少人数だった。自動小銃を持っただけの輕装な騎馬兵に前後左右を監視されながら、隊列はなだらかな丘陵地帯を南に向かつて歩き続けた。炎天下の乾ききつたこの道には一筋の小川も一カ所の井戸もなく、飲料水に一番苦勞した。水筒の水がなくなると水のことばかり思つて歩く。飢えと渴きに疲れ果てた兵隊が崩れるように座り込むと、監視兵は乗馬を飛ばして近づき、罵声を浴びせ、自動小銃を突きつけた。長い間、土の上で寝る生活が続いたために下痢をする者が後を絶たなかった。下痢をした兵隊が隊列から離れて草むらに屈むと銃で小突き追いつてくる。食糧も水も支給されず、ソ連兵の怒声に追われて歩き続ける私たちは、言い知れぬ

屈辱感と疲勞のため、あえぎながら重い足を運んでいた。いつしか真つ赤な太陽は山端に隠れて、前方に広がる草原が燃えるような夕焼けに彩られると、地平線の果てまで延々と続く行軍の列に大休止の声が上がリ、この日の行軍がやっと終了した。

翌朝も夜が明けると「出發準備」の声で起こされた。ここでは「起床」はなく、いきなり「出發準備」である。洗面の水も朝飯もないのだから、朝の目覚めから即行軍であった。夜露に濡れて重くなった毛布と天幕を巻いて肩にかけると、隊列を作つて南に歩き始める。道路の両側に畑らしいところが見えると、長い隊列は道を外れ畑の中を行進する。待望のキビ畑があると、一万人以上の將兵に一本残らず踏み荒らされた。食糧が手に入ると、今度はキビを焼くための燃料として枯れ草や灌木を集め、外套に詰めて運ぶ。ソ連兵は糧秣を支給しないので知らぬ顔で傍觀するだけであつた。

今日の大休止は集落の近くで井戸があり、交替で水汲みもしていたが、私たちの分隊へいつ回ってくるか

わからない。ひょいと脇を見ると水路が近くにあり、少量ながら水があつたので長時間待つこともなく水を求めたので、早速馬鈴薯を煮て食べることができた。次の朝明るいところで見ると、水路の水と思つたのは数日前に降つた雨のたまり水で、豚やニワトリがかき回した汚水であつたが、全員腹が悪くはならなかつた。

九月一日、街並みが遠望される丘の上に着いた。初秋の日光を受けて輝く大屋根が目を引く。「おい、あれは王爺廟だぞ」と大声で知らせる者がいると、それに答えて「そうだ、興安の町だ、白阿線の鉄道のレールも見えるぞ」と興奮した声も聞こえる。町の手前にある草原には川が流れ、その川岸に黒っぽい幕舎が建ち並び、赤旗も林立していた。興安の駅から汽車で日本に帰るとのことので隊列を整え、丘を下り、雑木林を貫く道路を進み、川沿いの十文字まで来ると、ソ連兵が並んで我々の行軍を見物していたが、入れ墨をした大男が何ごとかわめくと、隊列の先頭を歩いていた連隊長に殴りかかつてきたではないか。あつという間の

出来事であつたが、さすが我が連隊長殿、帽子を直すとは平然と取り乱すことなく歩いてきた。聞くところによると、連隊長はハバロフスク戦犯収容所で刑期を終えて、昭和二十五年家に帰つたという。

早速、連隊長を先頭に立てるのは危険だとのこと、名前は忘れたが、若い将校を先頭に立て行進した。我々の行進を見物していた人々の中には、蒼い目玉や赤い頭髮に混じつて、粗末な木綿のスカートがはちきれんばかりに太つた女性兵士の姿や、十二、三歳と思われる少年兵士の機敏に動く姿もあつた。ナチスドイツとの戦争で苦戦したソ連軍は、女性や子供まで戦場に投入していた。半裸の両腕に時計をはめた大男の兵隊が「ダワイ、ダワイ」と隊列に割り込み、混乱が起こつた。私の前を歩いていた兵隊が入れ墨をしたソ連兵に腕を掴まれ、時計を奪われる。隊列の前の方でも騒乱が起こつた。怒声が乱れ飛ぶ中で「時計や貴重品は隠せ、駆け足で走れ」と叫ぶ声も上がる。道路の両側から「ダワイ、ダワイ」と掛け声がかかり、毛むくじゃらの太い腕が伸びてくる。取られまいと走

る。武装解除された我々は捕まらないようにただ走る。ことだけが防御の手段で、自分だけでなく捕虜の現実をまざまざと思い知らされた。

ドイツとの戦争の経験をした、抜け目のないソ連兵の略奪で悔しきで駆け続けたが、強奪軍は「ダワイ、ダワイ」と襲いかかってきた。「ダワイ」とは我々が聞いた初めての「ロシア語」であったが、「急げ」とか「走れ」「来い」というように多種多様に使い分けられた。我々には略奪に使われた「ダワイ」であり、狙われたのは時計であった。

このとき、前方よりサイドカー付きのオートバイが疾走してきた。オートバイは強奪軍の現場で急ブレーキをかけると、ソ連将校がサイドカーの中で立ち上がり、大声で何ごとか叫び、ソ連兵たちに向かって拳銃を構えた。ソ連将校の眼は血走り、今にも拳銃から火を噴かんばかりの迫力だった。略奪兵共は将校の気迫にのまれて、先ほどまでの威勢はどこへやら、こそこそと雑木林の中に消えていった。拳銃を握ったソ連将校のオートバイが次の略奪現場に向かって立ち去る

と、私たちもほっとして一息入れた。軍紀の紊乱したソ連軍の中で、憲兵が共産党幹部と思われた。正義感の溢れる将校の出現はありがたかった。その後もオートバイを疾走させて日本軍の隊列を守ってくれた。

略奪兵の最も欲しがる品物は時計で、万年筆や帯革なども奪われ、雑囊の紐までナイフで切り取られた兵隊もいた。略奪騒ぎが収まると、師団の隊列は河に沿った広い道路を西へ向かって行進した。河の対岸はソ連の駐屯地で、大きな黒っぽい幕舎が立ち並び、夥しい数の自走車が整然と集結していた。無気力に歩き続ける隊列の傍らを「USA」のマークを付けた軍用トラックが次々と疾走して、砂塵を我々に浴びせかける。トラックはすべてアメリカ製であった。黒い車体の屋根から煙突が飛び出した大型トラックが駐車していた。隊列がそばを通るとパンを焼く匂いが漂って、思わず生ツバを飲んだ。

進行方向の前方に集結した戦車群が見えてくると、私たちの関心はこの戦車に集中した。戦闘中に散々と我々を悩ませてくれた相手に間近にお目にかかれるの

だ。ソ連兵の中には巨大な重戦車に腰をかけたリ、またがってヒマワリの種を噛みながら我々を見物している者もある。間近で見上げる戦車の巨大さに驚かされ、次にその装甲と装備に圧倒されて息の詰まる思いがした。外装は凸凹そのままの粗面仕上げで、厚さ二十ミリもある粗削りの鋼鉄製の砲塔で、そこから三メートルを超える巨大な砲身が空をにらむように突き出て、まさに動く城塞の趣があった。世界最強の戦車に威圧され、ソ連の機甲部隊の偉容に接した私たちは、いま一步停戦が遅れたらと考えると愕然とした。一〇七師団は風前の灯火だったからである。

「ダワイ、ダワイ」で略奪されながらここまで来たが、興安の駅が混雑しているので、輸送列車の到着待ちのためソ連軍の駐屯地から約二キロ離れた河原へ逆戻りして露営した。興安に到着しても食糧の支給はなし。日没になると気温は急速に冷え込み、空腹と寒さに震えながら河原の流木を集めて焚き火をした。今日一日のことを回想し今後のことを考えると、暗澹として気分は落ち込んでいった。

暗闇の中から、前に内務班にいた石岡兵長が顔を出して耳よりの情報を知らせてくれた。「我々一〇七師団の将兵は興安で輸送列車の到着を待ち、日本に帰国する」という重大なニュース。この情報は、私たちにあって寒さや空腹を吹き飛ばすほどの朗報で、分隊ごとの焚き火の周りが急に明るくなった。

「辛い捕虜生活もあとしばらくの辛抱で、いくら待たされても正月までには家に帰れるぞ」と古兵殿は無精髭いっぱい顔の綻ばせる。「昼に座って、正月の餅が腹いっぱい食える。よし、頑張って元気で故郷へ帰るぞ」と初年兵も張り切る。新たに生きる希望が湧き、石にかじりついても祖国に帰るという目標が決まると気分も明るくなった。

焚き火の周りでは、故郷の餅料理や秋田のきりたんぽ等、食物の自慢話が弾んだ。皆、久しぶりに笑い声も出て賑やかな雰囲気になっていたこのとき、突然轟音が連続して起こり周囲は急に明るくなった。暗闇だった上空に華麗な光が眩しいばかりの色彩をまき散らした。河原に分散していた師団の将兵は驚いて一斉に

立ち上がると、ソ連の駐屯地から照明弾や信号弾が連続して発射され、青や赤の花火が絶え間なく打ち上げられて河に反射、この野営地まで明るくなった。ソ連側での戦勝記念の花火大会と思われる行事が二時間ほども続けられた。

翌二日、夜の寒さのために夜半目が覚めた。野営地の周辺にまたソ連兵が出没して「ダワイ、ダワイ」の略奪騒ぎが明け方まで続き、便所にも行かれなかった。当地に当分の間滞在する予定と伝達された。その日はソ連軍の「対日戦勝記念日」で祝賀会が催されると聞き、昨夜の花火大会はその前夜祭であったと知ったが、我々には関係のないことで腹立たしい思いがした。分隊ごとの幕舎（幕舎と言っても、残材を拾い集めトタン切れを屋根にして作った四〜六坪くらいの仮小屋）に監視一人残して、食糧の徴発と薪探しに出かけた。他部隊に荒らされていない畑を探しながら草原を歩き回った。軍袴の裾が朝露に濡れて歩きにくい、何としても食糧を確保しなければ帰れない。野営地からだいぶ離れた地点で幸運にも馬鈴薯の畑を発見

した。分隊の兵隊が先を争って掘り起こすと大きな芋がゴロゴロと出てくる。夢中になって掘っていると、こちらに向かって走る黒い影が目についた。長柄の大鎌を担いだ満人が三人、宙を飛んで走ってくる。私は思わず「敵襲、敵襲」と大声で叫び分隊の連中に驚報を発し逃げ出した。満人たちは刃渡り五十センチもある大鎌をビュンビュン振り回し、ザーッザーッと音を立てて草をなぎ倒しながら近づいてくる。こんな奴らに立ち向かっても勝ち目はないので、芋を包んだ外套を担ぐと逃げ出した。命がけの芋掘りだったが、この日の戦果は抜群で、収穫した馬鈴薯を飽食した。満腹すると皆活気づき、古いトタンや板を拾ってきて幕舎の補強を始めた。降雨に備えて周囲に溝を掘ったり、便所も掘った。昨夜のように略奪兵の侵入があるので、その対策も練らなければならなかった。

日没になるとまた花火大会があり、野営地周辺に祝賀会の祝い酒に酔ったソ連兵が現れた。女性の兵隊を連れて幕舎内を物色するアベック兵の姿も見られた。我等は物騒で寝ることもできず、息をひそめて彼等の

立ち去るのを待った。後方の幕舎からのしるような声があると「ダワイ、ダワイ」とロシア人の掛け声が起こり、暗闇の中を四、五人のソ連兵が靴音も高く走り抜けて行つた。略奪が始まったのだ。このときソ連兵が走り込んだ闇の中から「泥棒！泥棒！」と連呼する声と、トタン板や飯盒をたたき「ガンガン」という金属音が突如として沸き上がった。私たちもトタン板に飯盒を打ちつけて連呼すると、周囲の幕舎からも一斉に騒音が叩き出された。野営地の一万人余の将兵が爆発したように騒音を撒き散らすと、奴等も慌ててコソコソと退散した。

毎日の日課は食うための食糧の徴発と薪採しで、畑の野菜も一万人の将兵が荒し回り、すべて食い潰してしまつた。遠くの畑に向かうとカンボイが威嚇射撃するので、おのずと行動範囲も限られ、収穫も日々細くなつていった。ソ連軍から食糧の支給もなく、取り尽くされた畑を再び掘り返して、小指の頭ほどの屑芋を拾い集める日が数日続いた。芋食も飽きて、おろし金ですり潰しサラシで絞り固めて煮るとコロッケのよう

なものができる。ここで覚えたことは、煮えないうちに塩味をつけると煮えないで終わるが、よく煮てから味をつけると、よく煮えて美味しくなるということであつた。

興安に到着して一週間ほど経過した頃、興安が混雑して帰国が遅れるので徳伯斯の兵舎跡に入るとのこと、部隊の移動が伝えられて、歩兵部隊から慌ただしく出発が始まつた。二、三六砲兵隊の我々將兵が興安を出発したのは九月十日朝であつたと思われる。行軍途中、見上げるような重戦車の砲身にまたがっているソ連兵が手風琴（アコーディオン）を奏で、男女のソ連兵たちが美しい声でロシア民謡を歌っている傍らを長蛇の捕虜の列が行進をしていった。汗と垢に汚れた背中に薪を背負い、腰に缶詰の空き缶で作った湯飲みを挟んだ隊列は遅々として進まず、業を煮やしたカンボイが「ダワイ、ヴィストラ、ヴィストラ」と怒声を浴びせかけてきた。

九月十一日、私たちの隊列はなだらかに起伏する丘を辿っていた。前方には大興安嶺の連なりが姿を見せ

始めた。高原の道を長蛇の列が進んで行くと、周囲に異様な臭気が漂い始めた。前進するほど強烈になってくる。まるで腐敗した魚の内臓をぶちまけたような強烈な異臭が鼻をつく。荒涼とした草原に戦車のキャタピラの跡が赤土の上に幾条も走り回り、幅の広いキャタピラの跡には引き裂かれたカーキ色の布や土に埋もれた鉄帽等が見られた。左手五十メートルほどの草むらから、カラスが十数羽飛び立った。先ほどからの異臭はここだった。黒いむくろに群がる、首に白い毛のあるカラスの姿が散在していた。

「友軍が大分やられているぜ、どこの部隊だ？」と声かすると、前の方で「おい、あれを見ろ、野砲だ」と叫ぶ声があった。指差す前方を見ると、兜虫がひっくり返ったように車輪を上に向けて転がっている火砲が太陽に照らされてきらきら光って見えた。私たち山砲隊は入隊時、一大隊は九〇野砲でお馴染みだったが、昨年新設された二大隊の火砲がこの鞍馬十五榴であった。

『ソ満国境戦闘実録』によると、八月十四日、松本

吉富大隊長の率いる鞍馬十五榴が大石塞にてソ連戦車群と死闘を演じた末に玉砕した戦場跡で、この戦闘でおよそ三分の二、約二百人の尊い戦死者を出したという。

我々隊列が声もなく前進していく。立ち止まるとカンプイの「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ」の罵声が飛ぶ中を足取りも重く二歩三歩と、うしろ髪を引かれる思いで進んだ。「俺たちも一緒に連れて帰ってくれよ」と二大隊の戦友が呼びかけてくるような思いにとらわれた。目の前にある戦友の屍一つ埋葬することもできずに立ち去らねばならぬ捕虜という丸腰の自分たちが情けなく、恨めしかった。この戦闘に連隊指揮班の富田広君（水沢市在住）が生き残り、第四中隊長今尾中尉が軍刀を抜き盛んに指揮していたが頭部を敵弾にやられ、戦死を遂げたのを目撃している。

西口、号什台の戦闘で感じたことは、歩兵部隊がいかに勇敢でも、支援砲火の圧倒的な破壊力なしでは敵の銃火の壁を突破することは難しいということであった。例として一八一部隊の二大隊、三大隊の全滅、ま

た野砲二三四部隊一大隊及び二大隊の悲劇は、索倫と大石塞で砲兵だけで単独戦闘を行ったことと、敵の自動短小銃、重戦車等、近代兵器で武装された敵軍に手元に飛び込まれたことにより起こったことであり、拙劣な作戦計画であったのかと思われる。

この日の夕方、二三四部隊の駐屯地であった徳伯斯駅に到着。駅には貨車が数両放置されていたが、機関車は見られなかった。ソ連兵の警戒する駅前から約二キロほど進むと、丘陵の陰に懐かしい半地下式の三角兵舎が見えてきた。兵舎はかなり破壊されていたが、すこし手直ししたくらいで屋根の下で寝られることが嬉しかった。翌日から糧秣の支給が開始され、少量の小豆が配給された。ソ連から食糧としない小豆だけの支給で、毎日の食糧は砂糖も塩気もないゼンザイだけで閉口した。また、今まで通りカンボイの警戒下にキビ、芋掘り、大根、野菜等を集め、個々ではなく部隊の炊事場を利用して炊事を行った。

翌日から帰国列車が着くまで糧秣集めと若干の使役があった。私たちは畑へ大根や人参を掘りに行き、掘

りたての大根を生で食べたときの美味しさは日本梨を食べたようで、今も忘れられない。近くで異臭がするので周囲を探すと、三十メートルほど離れた藪に友軍の遺体が散乱していたところがあった。次の日、穴を掘り丁寧に埋葬、野花を捧げて帰った。帰国列車の到着を待ちながら、二週三週と日時が過ぎ、周りの風景も秋と変わり秋風が吹き抜けていき、寒くなってきた。

徳伯斯に到着してから一カ月後、やっと輸送が開始されることになった。最初に師団本部を中心とした第一梯団から出発、その後順調に輸送が進み、十月二十日頃、私たちも輸送列車に乗り込むこととなった。角田連隊長に率いられた二三四部隊の将兵は、早朝から徳伯斯駅に集合して列車の到着を待ったが、列車はなかなか来なかった。ソ連軍に聞いてもわからないと言う。カンボイのソ連兵ものんびりしたもので「ヤポンスキー、ダモイ、トウキョウ、ハラシヨ」(日本の兵隊、帰る、東京へ、よろしい)と愛想が良い。私たち三大隊の藤野大隊長が時折、軍袴の前をはだけて何を

するのかと思っていたら、時計を取り出して時刻を確かめている姿がおかしかった。大隊長殿もソ連兵の略奪から時計を守る工夫には大変苦心をされたようだ。この場所で半日ほど待たされた頃、やっと煙を吐きながら貨物列車が到着した。

帰国するために用意された有蓋車の内部は、幅広の板で上下二段に仕切られている。一車両に百人ほどが別れて乗り込んだ。貨車なので明かり採りの小窓が上部左右四カ所にあるだけで薄暗い。一車両には糧秣等を積み込んで駅を出発した。久し振りに聞く汽笛の音が妙に胸を弾ませる。貨車二十両に将兵を満載して大興安嶺の山中を走行していたが、急勾配の上り坂に差しかかるとついに息切れがして動かなくなる。こまもあつた。重い貨車の扉を開けて各車両から兵隊たちが飛び降り、見る間にレールのそばに並ぶと大小便の放列を敷いた。前方機関車より大声がして「全員下車、列車の後を押せ」との珍伝達があつた。全員でそれぞれの貨車に取り付き、汽笛を合図に「セーノ、コラ」と掛け声を上げてエンコした列車の後押しを始めた。

列車はゆっくりと徐行しながら急勾配を上り切り、その後には下り坂と平地になり、翌朝白城子駅に到着した。白城子駅付近はソ連空軍の爆撃を受けて惨憺たる状況であつた。中でも多数の機関車と客車が折り重なって転覆した現場は悲惨な状態で、駅舎もかなり破損していた。官舎もやられたらしく、大量の書類が道路や野原に散乱して風で飛び散り、足の踏み場もない状態であつた。構内に軍用列車も何本か到着していて、赤い腕章を付けた満人が美味しそうな饅頭やギョウザを入れた籠を下げて売り歩いていた。金のある者は争って買い求めていた。敗戦後も満銀券や日本圓が通用していたようだが、私みたいに金のない者はただ眺めているだけだつた。

当時満州国内にあつた日本の設備は全て解体され、食糧その他の物資と共に根こそぎソ連へ持ち去るらしく、ソ連貨車の監視兵五〜六人で警戒している姿が見えた。半日くらいして列車がガタンガタンと動き出したとき、薄紙に包んだ小豆様の偽物アヘンで満人を見事にだまして鶏の丸焼きをせしめた古兵殿がいた。私

のような二年兵と違い年季の入った兵隊は、どのような環境に置かれても要領よく抜け目なく生きる術を身に付けていたことには驚いた。

白城子を発車したダモイ列車は白阿線を離れ、新京へ向かってゆっくり走り始めた。扉の間から外を眺めると、満人街は申し合わせたように赤旗を掲げている。ソ連軍歓迎の意思表示と思われる。このとき急に誰か「変だぞ、この列車は北に向かっていないぞ」「北に向かうわけではない、間違いではないか」と、貨車の中は騒がしくなった。白城子から大連港に出るには右折して南進のコースをとらなければ日本に帰れないのだ。列車は北に向かってひた走りに走る。貨車の中は暗い沈黙に包まれた。「ソ連軍は俺たちをどこに連れて行くのだ」つぶやくような声があると、意気消沈した兵隊たちは溜め息をつく。「そうだ、大連は引揚者が満員だからウラジオストックから日本海を渡り敦賀に上陸だ」と新しい意見が出ると、皆もつともらしく同調した。人間は、一つの希望が破られると次の希望にすがりつく弱い一面があるのだ。徳伯斯を出発して

三日目午後、チチハルの手前、昂昂溪駅に到着した。ソ連側の説明によると、ここは帰国準備のために設けられた収容所であり、この収容所で日本に帰る乗船順番を待ち、逐次帰国させると言う。駅の周囲にはソ連本国に送られる略奪物資の梱包が山積みされていた。

駅前で隊列をつくと、約五キロほど離れた元日本軍兵舎跡のある小民屯収容所に入所した。この収容所は今までとは違い警戒は厳重であった。周囲には、二重の有刺鉄条網が張りめぐらされて、一メートル以内に近づけば予告なしに射殺すると脅かされる。収容所の四隅には櫓があり、その上に自動短小銃を構えたソ連兵が監視していた。

ここに、既に先発した第一八一部隊や師団挺進大隊工兵隊の将兵、同郷の石川英君、小野寺栄治君、川崎の畑正次君等の姿も見られた。戦争をしなかった部隊の人たちは暖かそうな一装（新品で、儀式のときか外地出征のときに着用した）用の冬衣袴を身につけ、張り切って元気良く体操をしていた。また、よく肥えた人たちが軽作業をしていた者もいた。

それに引きかえ一〇七師団の將兵は、戰場を駆け回り、山野を踏み分けて渡った三装（古い）以下の夏衣袴で寒さに震え、服は汗と垢に汚れたボロボロの姿で、腰に命の次に大切な湯飲み用缶詰缶を下げ、とても関東軍に所屬した將兵とは思われず、軍隊の矛盾を身にしみて感じながら兵舎の割り当てを待っていると、後方を一装着用の兵隊が三十人ほど通りかかった。先頭を歩く下士官は新品の長靴と白い作業衣を袴に着こなした活発であった。私たちを見回すと「汚ねえなあ」と呟き、蔑むようにして行き過ぎようとした。

このとき我々の群れの中から「待てー」と尖った声が出て、三装の古年次上等兵がやにわに下士官を殴り倒した。長い間心の中にくすぶっていたやり場のない悲痛感がここに來て爆発した。「俺たち国境部隊の者が草の根を齧りながらソ連の戦車隊と生死をかけて戦っていたとき、貴様等は何をしていたか。いいか、このぼろ服には興安嶺で死んでいった戦友たちの怨念がこもっているのだぞ」、胸のすくような唖呵だった。後方部隊の兵隊はこの氣迫にのまれてうなだれて聞いて

いたが、殴られた下士官はいつの間にか姿を消したという一幕もあった。

やっと兵舎の割り当てを得て舎内に入った。あとで氣付いたが、柱の一部に「胆沢郡若柳村香取小原誠」と筆書の跡があった。私の先輩が先に家に帰ったことを心強く感じた。

翌日朝食後、ソ連の要求で使役に駆り出された。営庭に集合すると三十人ずつの分隊に分けられた。私たちの分隊はロシア語のできる下士官とカンボイ二人に誘導されてトラックに乗せられ、収容所を出発した。

十月下旬の北滿は冬の感で、晴天であったが肌を刺すような寒風が夏衣袴を通じてしみてくる。二十分ほど走ると大きな建物跡に着いた。内部をのぞくと大きな機械はすべて解体運搬されて、壊れた通信機が散乱し、壊れた機が一個ボツンと置かれていた。聞くところによると通信隊の跡であるとのこと。次に赤煉瓦作りの倉庫に行き、見ると中にはおびただししい衣類が雑然と投げ込まれていた。その中には軍用でなく在留邦人の衣類も混じっていた。私たちはこれらの品々を整

理した上、梱包する仕事であった。作業を終えて帰るときは日もとっぷり暮れ暗くなっていった。途中大きな十字路で、南から北へアメリカ製軍用トラックが連なっていて通行中のところに出会わせ、待ち合わせとなった。何千台か数知れない同じ型の自動車も赤や青の信号をつけて長く列を作って走る様子は大変奇麗で、当時我々としては珍しく感じたが、火事場泥棒の戦利品獲得には腹立たしく思った。

その後も私たちの後から一〇七師団やほかの部隊の将兵が入所して来た。戦争をしない部隊の兵隊たちは、薄汚い私たちを何となく敬遠していた。営庭を歩いても私たちを避けるようにして通り過ぎる。こちらから話しかけると逃げるようにして遠ざかるのだ。お互いに上司の命令により捕虜となった関東軍の兵隊同士が何故話し合うことを避けようとするのか、理解に苦しむ毎日であった。しかし、関東軍の中で最後まで孤軍奮闘した一〇七師団の将兵は、彼等から「汚い、カラス部隊が来た」等と言われながらも、誇り高く胸を張って帰国の日を待ちわびるのだった。

後でわかったことだが、日本兵の連行を一時中断して満州国内のあらゆる施設、資材、物資を根こそぎ自国へ運んだため、鉄道輸送は一層混乱したのである。毎日のように駅や軍の倉庫、工場へと交替に使役に駆り出された。いつの間にか我が軍の物が今はソ連軍の手中に収まり、その上運搬までさせられるとは、口に出来ないが誰もが感じた悲哀の日々であった。

ご飯を腹いっぱい食わせるから、重労働だが糧秣積み込み作業に出役しないかとの話があったので、帰りに現品（白米）を失礼しようとの下心から志願をした。

深夜の貨車積み込み、駅の裏から距離にして百メートルくらいのところから野積みみの糧秣を貨車に積み込むのだ。相変わらずソ連兵は「ダワイ、ダワイ」とせき立てる。我々はわざと牛歩戦術に出るが、南京袋一袋背負う。荷は重く体にきく。我々の食糧を奪取され、その上酷使に従わねばならない不満から、故意に穀物袋の縫い目をほじくり穴を開け、こぼれるのはおかまいなしで運ぶ。まさに以心伝心、一斉に実行され

る。ソ連兵へ言葉は通じないから「いくらかでも軽くして運ぶ方がいいぞ」と誰かが叫ぶ。この言葉に誘われたように袋を切る者、裂く者、穴を開ける者等あり、粟、大豆、粟、高粱等の運搬が朝明るくなって終わった。

プラットホームは、こぼれた穀物で砂を敷いたようだ。約束通り缶詰で白米飯を腹いっぱい食べ、白米がなかったので大豆を失敬して新しい靴下に入れ、腹に巻き収容所に帰った。我々が積み込んだ食糧は収容所の主食であったとは。「あのときの穀物」をもっと多く積みよかったですと悔やまれた。

待ちに待った藤野巖大隊長を梯团长とする千五百人の婦国編成が達せられると、私たちの周辺がにわかに慌ただしくなった。新しい防寒被服の支給を受けると、やはりウラジオストック経由で帰国させるのだなと確信した。

十月二十六日、帰国するための装備を整えて整列した。背の高い貫祿のある収容所長のもっともらしい「訓示」が通訳を介して伝えられた。「諸君は停戦協定

に基づき、本日、日本に向かって帰還の途につくことになった。輸送船はソ連のウラジオストク港から出港する。これからの列車輸送にはソ連軍の指図に従って一人も欠けることなく無事に帰国するように」全員の手拍に包まれて所長の話が終わると、藤野大隊長から輸送間の注意事項が伝達されて出発した。

千五百人の将兵は新しい被服を着用、装具を背負い、五列の縦隊を作って収容所の営門を出た。昂昂溪駅には黒みがかったベンガラ色をした輸送列車が既に到着していた。我先にと乗り込んだ有蓋車の内部は、徳伯斯駅から乗った貨車と同じく上下二段の棚で仕切られていた。婦国の夢に胸を弾ませる将兵を乗せた輸送列車は、チチハル市内を離れると北へ北へと驀進した。満洲里で一時停車後、出発したのはこの日の夕刻であった。

国境を越えるとソ連領で、小窓よりのぞき見ると、灰色をした空の下に荒涼とした雪原があり、建物も丸太積みみの四角な家でベンガラを塗り赤茶色で、さすが赤の困らしかった。列車を見送るロシア婦人の姿もみ

すぼらしく、日本軍の古い軍衣を来た女性の姿が寒々として異様に見えた。独ソ戦のために疲弊したソ連国民の生活ぶりが伺えた。

駅の表示板も今までにない見慣れぬロシア文字で、どこを走っているのか見当もつかない。夜、誰かが「チタに着いた」と言う。列車は広い構内に停車。各車両から兵隊たちが飛び降り大小便の放列を敷いた。市街地の夜景らしきものも見え、間違いなくチタのようだ。ここから西か東かの分岐点である。しばらく停車していたが扉を閉め発車した。誰も気掛かりで眠れなかった。夜明けとともに進行反対側が明るくなってきた。皆の顔が一変した。西から太陽が昇るわけはない、西に向かって走っている証拠であった。半ばやけくそに「太陽は西から出るわけないよ、モスコーに連れてって銃殺さ」「日露戦争の仇討ちされるのさ」「いや、今は国際法があるからそうでない」「ではなぜ我々を西へ連れて行く、パンやイモで俺たちは生きられんぞ」「だが、戦争で負けて日本へ帰れた顔でないけどな」「いや、俺たちは負けたわけではない、号什

台の戦闘で敵は負けて逃げたではないか。命令で武装解除したまでだ、そんな話すんな」、次第次第に意見や会話が荒くなった。

「もう天に任せるより仕方がない。なるようになるさ」の言葉で車内は静かになり、お通夜の客を乗せたような列車は西へ西へと走り続けた。

ボダラ収容所

昭和二十年十月三十日午後、ガタンゴトンとブレーキのきしむ音で列車が停止した。しばらくして外の方から「下車準備」の声が聞こえた。間もなく扉が開かれ下車が開始された。話によると、シベリア鉄道四〇号退避所とのことで、ここで上層部の人たちの話し合いがあり、しばらくして熊谷史朗大尉（ポルトイ行き）一行七百人と別れ、私たち藤野少佐一行八百人に「出発準備」の声がかかり、個々の荷物を背負って夕方、雪原の歩行開始であった。しばらく歩くと大きな河に突き当たった。対岸に向かって一本のワイヤが張ってあり、大きな舟が繫がれていた。一回に二十人くらい乗ってワイヤを引っ張りながら向こう岸へ渡り、

ここで火を焚き順番待ちをした。誰か「この河の向こうに氷の牢屋があり、食糧の支給もなくして殺されるのではないか」と悲観的なことを言う者もあったが、寒さが厳しく、手足を動かして凍傷を防ぐことではないで、誰も答える者はいなかった。

峠を一つ越えて山の奥へ奥へと歩き続け、森林に囲まれた盆地に出た。緩やかな斜面の広場には我々を収容する大きな建物、離れて民間の建物が五棟ほど見えてきた。現場に来てみると、丸太造りの大きな平屋、バラック一棟だけで、これから自分たちが住む小屋を建てるのだとの説明があった。なんと無責任、無計画なことか。しかし、これがソ連流と諦めざるを得ない。この夜は携帯天幕を松の中心に繋ぎ合わせ幕舎を造り、雪の上に寝るより仕方がなかった。

これが十一月一日、ボダラ收容所の始まりである。翌日から作業が始まったが、まず丸太小屋を造るための伐採で、鋸と斧が渡され、寒い天幕生活に疲れた捕虜たちはせめて丸太小屋に住みたい一心で懸命に働いたものであった。

丸太小屋の周りに丸太の塀と有刺鉄線の柵をめぐらし、監視望楼も建てられ、一応收容所の形ができ上がった。また、丸太運搬用の橋路も造った（橋溝を掘り、夜散水してコチコチに凍らせる）。山の土場から河岸まで木材を運び積み上げられた丸太を、春の雪解け時、渦巻く河に次々と投げ込み、下流にある製紙工場貯木場で引き揚げ、用途に応じて分類することであった。

ある日、関見習士官と山の土場より河岸までの距離を測ったことがあった。ノルマの基本をつくるためらしい。帰りに初年兵の佐々木与一君が河向こうの部落にパンを交換に行くとの話、危険だから取り止めるよう話したが、いつの間に收容所を脱出したのか、その後行方不明となった。

十二月初旬、いよいよ本格的な伐採、運搬作業が始まった。まず日本の軍医立会いのもとに簡単な身体検査があり、一、二級は伐採作業、三級は軽作業、四級はOKオケと称し、炊事その他の雑用であった。

十一月末頃と思われるが、将校が持っている軍刀の

取り上げがあり、引き揚げられる前に試し切りと称して薪割りをして返納した。

二十一年一月初旬、四五二部隊二百人、ポルトイの熊谷隊に転出。同郷の佐々木幸一君も一緒に転出した。一月中旬、私は三級とのことで、山裾の急な坂で馬糞の転覆があるので調整する責任ある仕事で、走り過ぎのときは溝に土をふり、走りの悪いときは雪を敷くなどして、大きな事故もなく二月中旬まで勤めた。作業係の加藤曹長より大変はめられ、今度は糧秣集積所の整理ということで、山田新一郎見習士官上等兵を頭として私と遠藤四男君他初年兵二人、計五人で営外勤務を命ぜられたときは一番うれしかった。場所はボダラとポルトイの中間で糧秣庫があり、パン工場もあって、民家十軒ほどのうちの離れ小屋が宿であった。初めの夜は南京虫に悩まされて一晚寝られなかった。このとき初めて南京虫を見た。ここではパン工場の薪切り、倉庫の蛙やニシン、雑穀の整理等の軽作業を三月中旬まで行い、その後、熊谷大尉が来場。ペトロフスタ（人口三万）の町へ糧秣受領に行くこととなっ

た。列車は無蓋車でただ乗りだが、寒いのには閉口した。糧秣はニシンの甘塩、樽入りの牛の頭足等の骨、牛の内臓、血の冷凍など肉類他、野菜等であった。帰りに時間があつたので駅の公園に立ち寄ってみた。奇麗に掃除がなされ中央に銅像があつたが、レーニンやスターリンではなく、この地方に尽くした有力者の銅像かと思われた。

汽車から降り、途中、腹がへつたのでヒロク河付近でニシンを焼いて食べたが、数の子のある雌より、わたのある雄の方が脂が乗って美味しかったことは今も忘れられない。

三月末日、糧秣整理の作業も終わり、本隊へ帰ることとなった。牧場の小屋へ牛馬が追い込まれるごとく、明日の作業を心配しながら帰り着いた。一二月頃は食糧の横流し等があつて給与が悪く、栄養不良で入院また死亡者が多く出たことは、糧秣輸送中のソ連兵の横流しによることがわかり糧秣輸送に日本兵の監視がついたこともあつたが、国際赤十字社、ソ連の高官等の視察もあり、食料の配給も次第に良くなった。

これに反してソ連收容所長は降格、一般兵となって不明の地に転動したとか。後でわかったことだが、号什台で戦闘した部隊が我々の警戒兵であったそうだ。

ジップヘーゲン收容所で、千五百人中八百人からの栄養失調、発疹チフスでの死亡者があつたと入院帰りの人に聞いたが、本当とのことで驚いた。我が收容所では六畳ほどの室をつくり、大型ベチカを取り付けて一日中薪を焚き、熱気消毒でシラミを撲滅した。毎日衣服、毛布等、交代で実施した。これが効果をあげ、ほぼ一カ月後には卵まで死滅する効果をあげ、不寝番でシラミ取りをすることがなくなり、安眠できた。ソ連軍医も同調し、腋毛、陰毛まで剃れとの命により、理髪経験者により剃刀でチンポの毛を全員剃られた。私も剃られた一人であり、十日間くらい、さざると気持ちが悪かった。

当收容所の伐採作業、運搬ともにパーセントが上がらず、将校たちも苦勞したようで、四月初め、大久保上等兵殿と木切をして休んでいたところへ運悪く中隊長が来て、作業をサボっていたとのことではいきなり大

久保さんがビンタを取られたことがあり、申しわけなかった。その後パーセント食となったが、私の家は木材業をしており、木切は自信があつたので、ガツガツしていた石倉古兵殿へ話したら相棒になるから頼むとのことで、二人で世話をして働いたら苦もなく一二五%ずつ続けた。そのため、毎日ラーゲル最高の粥飯一食だけでも食べることで、石倉さんと喜んだ。

当收容所では電気はなく原始的な生活で、明かり用と採暖のために松の脂根を燃やしたので、屋内で顔も衣服もみな真つ黒になった。シラミも増えだし、失意と栄養不足、過勞、不潔などにより病人も多発して、翌年二月頃に入ると赤痢や胸部疾患などで三十人からの戦友を失った。戦闘と長い行軍に続いて、酷寒地獄のツンドラ地帯のシベリアに入り、衣食住の不足の中で馴れぬ重労働をするから風邪をひいたりして、人生を終えた者もあった。

一月十三日朝、大勢で炊事用の薪材の運搬をした。枯れ木を担い、棒に綱の輪をかけての運搬では能率が

上がらない。快気の八中隊の三上国太郎軍曹が、長さ二メートルくらい、径二十センチもある松丸太を一人で肩に担いだ。炊事舎の少し傾斜したところへ数歩進んだとき、ツルツルに凍った地面で靴が滑ったのである。彼は丸太を抛り出す間もなく倒れ、丸太が頭を打った。そばで見えていたが全く瞬時の出来事であった。そして、この日も我々は重いノルマのために黒々とした松の伐採に出かけたことなど、良くない思いだけが残るボドラ收容所だった。

ポルトイ收容所

二十一年五月上旬、急に出町文雄軍曹（第三大隊段列）を長とする特殊技能者（鍛冶・鉄工・大工・洋服工・一部木材伐採）約五十四人が転勤することとなった。ところが私の相棒の石倉古兵衛、さすが軍隊の飯を多く食べているために祭りが早く、便所へ逃げ隠れたため、五十三人、十キロメートル東のポルトイ收容所へ自動車で移動し、作業の厳しい熊谷隊長の指揮下に入った。仲間は山田新一郎幹候上等兵、湯川の高繁君、隣村の石川亀君等がいた。あとで聞いたことだ

が、ボドラ收容所は赤字経営のため七月十五日閉鎖、チタ地区第二四收容所へ全員移動したとのことであった。

次の日より伐採は赤松で、二人一組、二百人くらいだったと思われる。十メートル間隔で上部に向かって進み、遅れると残材切りになりノルマが上がらないので、早く先頭に立つことが大事であった。よく木の下に初茸、芝茸等の乾燥茸が多くあったので昼飯へ混ぜて食べた。秋ともなると生の茸を腹いっぱい食べる、カロリーがないため力が出なかった。

二十一年七月頃、熊谷大隊長他の将校は将校收容所に転勤となった。その後、出町軍曹が收容所長となった。この頃、全員、階級章及び帽子の星も取った。

二十二年春、同郷南都田、藤田正一君が丸太の自動車積み込みをしていたが、足を滑らし丸太の下敷きとなり、ヒロクの病院に運ばれたが死亡。

八月頃、チタより政治部員として宮田君他二人来場。初めは張り切っていたが、そのうち皆と働いているうちに疲れが出たのか、おとなしくなった。

二十二年九月十一日まで、空になったボダラ収容所へ伐採作業に出張。以前、検知係の二人のマダムも大変奇麗になっていた。また、小学校の女子先生から頼まれて教材用の絵を描いたこともあった。

二十一年六月頃よりたびたび身体検査があり、体の弱い人から順番に帰るようだが、私の場合、弱ったときは炊事勤務となり、一カ月くらい勤めると山へ伐採に三回ほど繰り返して閉鎖するまで勤め、この間に三回賃金を頂戴したこともあった。

二十三年五月初め、日本に帰るとのことので収容所を閉鎖、鉄道貨車にて出発。相変わらず二段装置の車両で全員乗車（約二百人）。チタで千五百人編成を組みナホトカへ出発することとなったが、入ソ当時と同じトイレで垂れ流しであった。チタよりナホトカまで約十日ほどかかったが、日本の国より景色に変化はなく、原野となれば山林地帯、畑作地帯等、二日くらい続くのが普通であった。

午後一時頃、列車下車。ナホトカ第一分所前に整理していたが、そのうち将校収容所から偉い人達がやっ

て来た。隊長は若い将校らしく、他は年のせいか弱った人たちが多く「班長、便所に行ってください」と十以上も年の少ない班長に断り、列の外へ出て小便をした。鼻ヒゲは立たずに垂れ下がり、田舎のじいさんと同じで元気はなく、哀れであった。だが自分たちより早く第一分所に入った。またその後から来た部隊もあったが、スーチャンの炭鉱とかで元の収容所へ逆戻りをした隊もあった。我々の隊も夜十一時頃まで粘ったがだめで、行く場所もなく、海を見ながら涙をのんでナホトカの町より北へ一山越えた野原に天幕を張り、ナホトカ第十二作業大隊を結成した。

ナホトカ収容所

昭和二十三年五月中旬、ラーゲル（収容所）着。ここは後で聞いたことだが、ロシアの政治部の将校が「反ファシスト委員会」の役員と話し合いの上設計したものと言われている。早速「反ファシスト委員会」の選挙があり、各ラーゲルからのより集まりだが、ポルトイ地区から宮田さん、杉本伍長他一人で、出町軍曹は反動カンパにかけられ失脚した。

労働時間 八時間労働で、ノルマもソ連人と同じ

で時間外労働は行わない。休みは月四回の日曜日の他、祭日、祝日、零下三十五度以上の日は屋外作業は休みであった

ノルマ（労働基準量） 昔、農家で一人当たり田

打ち一人役、田植え、苗取りとも一人役二人というように、健康体の者ならば誰でも遂行できた

作業の種類 建築、農業、製剤工場、ベトン工

場、煉瓦工場、護岸工事、病院など。他に自分

たちのための仕事、炊事、パン工場、医務室、

浴場、洗濯班、縫製工場（被服、靴）、衛生班

（便所の汲み取りなど）、画家、楽団等

給与

主食 米二〇〇グラム 雑穀二五〇グラム

黒パン三五〇グラム

副食 生野菜八〇〇グラム 乾燥の場合五分

の一 肉五〇グラム 魚一五〇グラム

調味料 油二〇グラム 塩三〇グラム 砂糖一

八グラム

嗜好品 茶三グラム タバコ五グラム（将校一

五グラム）。将校はパイロス、他は葉

煙草一グラム巻くと一本

食事は、一日のカロリー三〇〇〇〜三五〇〇カロリーで不足はないが、昭和二十一年頃は横流しがあり、一人当たり右の半分にも当たらなかったときもある。

ナホトカ労働収容所はソ連政治部将校の計らいもあって規定給与以上の配給を受け、この糧秣でぼた餅、お汁粉、ドーナツ等自由に作り配分した。

収容所の設備

我々入ソ当時のラーゲルは営倉もあり、暗い建物の中では「捕虜だなあ」の実感があったが、ソ連の極度の窮乏と私たちも「今にダモイだ」とのことで、バラツクの修理もしないで寒い寒いで自暴自棄になっていた。これを救い出してくれたのが民主運動であった。

ソ連側からの要求は実行する、また我々の方からも日常生活の改善、収容所の設備の充実等の問題が取り上げられ、実現した。このラーゲルも私たちが帰った後

はソ連のアルバイトとして利用されたとか。

前に記載したが、私たち六百人は、ドナホトカの護岸工事に従事、五月中旬から二十四年七月中旬まで続けた。以前は七千トン級の船舶一隻しか着岸できなかったところを、十四カ月間に、四隻は楽に着岸できるまで延長した。我々の働いた成果は今も残っており、無駄働きではなかった。ここへ月に二隻くらい着岸した。そのときは作業を休み見送ったが、胆沢町の引揚者も多くいた。今も頭に残っているのは、ウランバートルから二十三年九月頃引き揚げた部隊、一等兵から大尉くらいまで階級章をつけ、二等兵、上等兵は将校行李を担ぎ地獄のような生活に耐え、将校は皆の上にあぐらをかき威張っていたことである。私は測量作業を休み、アクチーブに話したら、ソ連将校の命令なので致し方がないとのことだが、他は皆元気で歌を歌う等して日本へ帰って行った。

我がラーゲルでは、入口の営門に「明るく豊かな民主日本の建設」「万国の労働者、団結せよ」などと書かれたアーチが作られ、作業に行くとき、帰るときは

十人ほどの楽団員の行進曲で送り迎えをされた。八時間働いて帰りたくなくなっても音楽の伴奏があり、

「フランス人は愛する旗の光

ドイツ人はその歌唱う

モスコウ伽藍に歌響き

シカゴに歌声高し

高く立て 赤旗を その陰に 生死せん

卑怯者 去らば去れ 我等は赤旗守る」

と空元気を出して営内に入り、炊事の献立を見ると「ぜんざい、(小豆はっと)」とあり、喜んで食堂に入って食べたこともあった。この運動がなかったら、もっと兵隊は死んだと思う。

八月から十一月まで、チタ地区から来た人たちの民主運動は、反動カンパや家に帰りたと言った等、小さいこともカンバにかけたりしてファシスト的な民主主義で、今までの民主主義は行き過ぎであり、明春三月までに皆に喜ばれる民主主義の勉強をしようということになり、夕食後は討論会や研究会などあったが、

頭に入らなかつた。

文化活動の一端に映画観賞があり、「シベリア物語」「石の花」「せむしの子馬」等、心に残る物語ものであった。帰国後も家内で見た。

帰 国

護岸工事の測量作業一年三カ月、色々なこともあったが、急に帰国命令が出たのは七月十日頃で、当ラゲルは他の収容所と違い、OKでなく作業成績の良い人から帰国。第一回目の帰国メンバーに選ばれた。帰国のラゲルも一、二分所に入らないで、いきなり三分所に入り、税関検査を通り四分所で順番待ち。七月二十日、「遠州丸」に乗り組み、七月二十二日舞鶴に着いた。船の給食はソ連収容所より悪かつた。

「働かざる者食うべからず」の鉄則で、作業ノルマはソ連人にも厳しい。丸太の運搬自動車兵も夜の明けないうちから車を走らせて、午前中にノルマを上げる。こんなとき、丸太積み下ろしの我々に怒鳴りちらしもひどく、ノルマが終わると彼女の待つ貯木場の休

憩小屋で愛の営みに励むのである。人がいようが全くおかまいなしのソ連人の神経には恐れ入った。それにしても血気盛りの二十代初めの我々は、誰一人として「ピン」とも「カン」とも反応のない栄養失調で、身の衰れが悲しかつた。

ソ連抑留中三回、収容所が替わつた。初めのボダラ収容所は地獄で、糧秣の横流し等があり餓鬼道の苦しみで、事故死、栄養失調等で死んだ人は三十四柱もあつた。隣に枕を並べていた戦友と「家に帰ったら小豆餅いっぱい食べたいなあ」などと話しているうちに、音がしないので変だなあと思つて見ると死んでいた。死んだ人と寝ていても恐ろしいと感じなかつた。

二回目はポルトイ収容所で、人間らしい生活ができ事故死十六柱と記憶している。ここは伐採の事故が多く、枝が頭に落ちて即死をした者、切つた木が転がってきて圧死した者、木の間に挟まれた者、枝に飛ばされた者等が主な死因であつた。

三回目はナホトカ労働大隊で、ここは極楽であり天国であつた。ソ連政治部将校と民主グループ員の働き

によって給食は規定以上の糧秣の支給を受け、作業の行き帰りは楽団の演奏で励まされ、営内で入浴は一週二度、理髪は髪が伸び次第理髪室で刈ってもらえる。被服は悪くなって被服配給所へ行くと洗濯された新しい物と取り替えられ、自分で洗濯することはないので昔の軍隊以上に整っていた。

民主運動の中心は「反ファシスト委員会」で、民主グループ、文化サークル、青年行動隊等のメンバーでラーゲルの民主化の先頭に立って活動したが、二十四年より「反動の吊るし上げ」がファシスト的民主主義だとの批判があり、吊るし上げはなくなった。

私たち野村隊のボダラ収容所に近いジップヘーゲン収容所一八一部隊、早田少佐隊長の第五一二作業大隊千五百人中、半数以上の八百人の死亡者が出たことは、敗戦とはいえ、人道に許しがたきことと思われる。また、この周辺埋葬地に約三百人、私たちのボダラ三十四人、ポルトイ十五人となっており、入ソ後五カ月以内の出来事であった。第一〇七師団戦没者五、一七九人中、胆沢町出身者十二人、うちジップヘーゲ

ンでの戦没者は石川英（南）、小野寺栄蔵（若）、土井今朝治（若）、那須隆（若）、高橋秋夫（小）の五人であった。

挺進大隊へ転属された畑正治軍曹から二十三年三月にももらった手紙に、二十二年末帰還したことや励ましの手紙を頂戴していた。六十二年、鶴見区のお宅を訪問、話し合いをしたとき、西口の戦闘のとき私たちが火砲の前で急造爆雷を胸に、飛び込み命令が今か今かと時間が長く感じられ、そのうち敵の銃弾を数発受け、今も少々ではあるが破片が身体に残っていると話していた。

私たち第一〇七師団の戦友の人たちで、平成二年、青森五連隊の雪中行軍で殉死された御霊を祀る幸畑墓苑の一角に「アルシャン駐屯部隊戦没将兵軍馬慰霊之碑」を建立し、毎年八月末日、慰霊祭を青森戦友会の人たちが先達で行っている。このときは、各県の戦友、八月二十九日の敗戦までソ連軍と死闘を繰り返し、シベリアでは極寒と過酷な重労働に耐えて帰国された生き証人が夜を徹して話し合い、色々の思い出話

に花が咲き、次の日は再会を約して各県へと解散。

「アルシャン戦友会」は昭和五十年頃から全国規模で執り行われているようである。

なお、開戦より二十日間で終戦となったが、不明なことが三つありますので、わかっている方よりご教示を願いたい。

一 満州五叉溝、西口、徳伯斯、興安等、飛行場があるのに飛行機が一機も飛ばなかったことは、戦争が始まる前に全部自爆しておったのかどうか。

二 十五日、西口の戦闘のとき、師団司令部は山岳戦に備えて高いところを行動すべきを低地の軍用道路付近におり、アルシャンと興安からの敵に挟み討ちとなっていたので、山砲七中隊が丘陵上より駆け降り救出に向かい、対戦車攻撃を行い敵戦車群を後退せしめたことは天佑神助か。

この頃から雨足が激しくなり敵の砲撃も一時途絶えたことで、北方の興安嶺へと行軍した。この大激戦に日本の戦車一台も援助に来なかったのは何故であったのか。

三 抑留中チチハルで作業中、牽引車で荷物運搬台車

十五台ほど牽引していたが、十文字目で街角の家に接触することなく上手にカーブを切って進行できたのは、いかなることからそれが可能であったのか。

私は復員後五十年間、平和で恵まれた生活をしている。当時は戦争に参加することが男子の本懐であった。静かに過去を顧みると、青春時代を戦争、そして敗戦、あげくの果てはシベリアの捕虜収容所送りとなった。

戦争ほど無意味なことはなく、戦争ほど罪深いことはないことを身を以って体験した。西口の戦闘、号什台の戦闘、行軍中に亡くなられた戦友達、またシベリアの極寒の中でノルマと強制労働に疲れ果て、遙か故郷に想いを走らせながら、かの地に今なお眠る戦友に、心からなる哀悼を捧げたい。合掌。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年六月十日

入隊前の職業 農業、林業

シベリア抑留 昭和二十年十一月一日 ボダラ收容所
舞鶴復員 昭和二十四年七月二十四日 (遠州

丸)

復員後の職業 製材業

(岩手県 田辺 壮久)

白衣の捕虜

岩手県 高橋 三郎

私は「タワリシ」という言葉を「人殺し」と訳すことにしている。何が同志なのか、本当に「同志」ならそれなりの扱いがあつていいはずだと常に思い続けて、五十数年が過ぎ去った。

私はソ連軍がソ満国境を越えて満州になだれ込んだとき、新京の陸軍病院で病床に横たわる身であった。「結核」、当時今の癌ほど恐れられ不治の病といわれていた「結核」で、昼一枚ほどの段差もままならないほど衰弱しきった身体であった。そんな私達が白衣のま

まソ連に連行され、三年余り強制労働に従事して生還、七十数歳の今日まで生きていますということは、本当に自分でも信じられないことなのである。

ソ連軍侵攻の報に陸軍病院側は直ちに退避の命令を出し、有蓋貨車に、病室ほどではないが、ある程度の設備を設けて病兵を乗せ、釜山目指して出発した。

途中、満人の駅員に難癖つけられて列車が立ち往生し、そのたんびに持ち合わせの食料や衣類を差し出して通過させてもらい、何とか三十八度線までたどり着いたのは昭和二十年八月二十五日頃のことであった。

そこでソ連軍にストップをかけられ、そのまま平壤まで後退、学校のようなところに收容された。言いが振るっている。「貴方達は病人であるから、ソ連軍は人道的立場から貴方達を精密に検査診断をして療養させなければならぬ。現在日本の国は敗戦により食料も着る物も建物も不足していて、貴方達が今帰ったとしても何の治療も受けられないばかりか全員餓死するよりはかないだろう。日本の国がいま少し落ち着くのを待つて直ちに送還いたしましょう」